

2022年7月30日実施
オンラインシンポジウム『「戦争を伝える」ということ』
質問リスト

1 はじめに

(1) 回答対象質問数などについて

今回のシンポジウムでは、いただいたすべての質問に対して先生方より回答をいただきました。回答数は次のとおりです。

- 1) シンポジウム中に回答済の事前質問 (7件)
- 2) シンポジウム中に送られてきた質問 (10件)
- 3) シンポジウム後アンケートに記載された質問 (10件)

合計 27件 (先生方への個人的な質問は除く。)

ここでは、2)、3)の質問について共有いたします。

質問は、わかりやすくするために一部表現を変えている、または省略した箇所があります。

シンポジウム中で回答された質問はアップロードでき次第、当館のYouTube動画でご覧いただけます。

本シンポジウムの書き起こしは2023年9月発行予定の館報第9号に掲載します。

(2) 先生方の回答は登壇順で掲載しています。

2 シンポジウム中に送られた質問への回答

- (1) 私は歴史の授業をする時に、教科書や資料集など、生徒が最低限持っているテキストに戻って来られるように指導したいと考えます。先生方は、フィールドワークやご自身の体験したことをどのように授業に落とし込んでいるのですか。教科書は横に置いておいて、という形なのでしょうか。先生方に授業とご自身の経験の結びつけ方を伺いたいです。

<渡辺>私の場合は教科書に関連した資料特に実物を生徒に見せて授業をやりました。その実践は「実物・絵図で学ぶ日本近現代史」(地歴社)にまとめてあります。また実体験するためルールワークもよくやりました。

<川口>定年退職する3月までの授業では、高等部日本史1・2・3年の場合、休み明けの授業で休み中に訪ねた場所やその場所をなぜ訪ねたか説明してから、前学期の授業の続きへ。

訪ねた場所の多くは副教材の『最新日本史図表』（第一学習社）に載っており、へーっと生徒たちには図表を身近に感じるきっかけになったようです。一方、記述がなかったり薄い山川出版社の教科書には「？」。検定済み教科書および腰の引けている教科書会社・執筆者を疑え、検定のない図表類は割と自由に編集できることも説明できます。中等部1年歴史の授業では同じような説明後に学び舎の教科書を開いてもらい「確認」してもらいました。こんなことを続けていると、必ず旅好きの生徒が現れます。あるいは旅好きをカミングアウトする生徒が出て来ます。旅は自分の「視点」を動かすきっかけになるとそういう生徒のことを授業で紹介したこともあります（もちろん、本人の了解を得て）。6～12月に中1～高2の生徒には課題レポートを書いてもらい（12月提出締め切り）、と言っても何をテーマに書くかは本人の自由です。提出されたレポートの中に必ずどこそこを訪ねてというタイトルのものがあります。それらも含めてこれはぜひ読んでもらいたいと、それぞれの教員が選んだレポートを収録した社会科雑誌『葦』を年度末に編集・発行してきました。

<橋本>自分自身がフィールドワークで経験したことは、授業の中でのエピソードとして使うぐらいです。「個人エピソードを歴史の中に位置づける」というのは、私自身の見聞きしたことではなくて（当日は誤解を招くような言い方になってしまったかもしれませんが）、回想録などを、抜き出して教材化している、ということです。証言などを読ませることはよく行われていることですが、私の場合、1回の授業でなく、何回かの授業で、いくつかの歴史場面の具体的な証言として同一人物の書かれたものを使うことがある、というのが若干の工夫かと思っています。同一人物であることにより、生徒には実際に一人の人間が歩んだ道だということが実感されるように感じています。

(2) 各先生の世代に違いについて、相互に感ずるところはありますか。

<渡辺>1980年代は高校生が主体的に動く時代でした。ですから生徒と共にいろいろな所にいっしょに調べに行きました。それがだんだんしにくい時代になったように思います。

<川口>それぞれの時代にはそれぞれの「課題」があります。それに取り組んでこられたお二人に敬意を表します。小生はと言えば、高等部1年日本史Aの授業は戦後史の授業でしたが（22年度から歴史総合）、バブルの時代の自分自身のことも含めたエピソードを紹介すると、2010年代半ば以降の生徒たちからはため息が出ていました。ちょうど安倍政権時代と重なる、まさに時代閉塞の時代。

<橋本>私は、特にありませんでした。戦争に近いか遠いか、という違いはあったかもしれませんが、歴史教育や平和教育にかける想いは共通だったか、と思いました。

(3) 家庭内のできる、戦争＝怖いで、終わってしまわない平和教育のヒントをいただきたい

です。

<渡辺>歴史を暗記するものではなく、「考える」ものとしてとらえる必要があります。私の平和学習の原点は先輩の先生から戦時中の学童疎開した生徒が卒業式のために東京に帰ってきて疎開先の長野県のお姉さんにあてた手紙を見せて貰ったことにありました。そこには一人の生徒が「われ大君にすべてを捧げん」と絵いりで書いていました。そしてそれが殆どの生徒の認識であることが分かりました。どうしたらそんな認識になったのかを一生懸命生徒共に考えました。

<川口>因果関係と現場にこだわる一歴史は原因と結果の連鎖だと思います。それが時として嘘から出た実のようなことがあります。よくよく考えるとやはり因果関係があります。その面白さを実体験も交えてお話されては。面白そうに話される、その表情をご家庭の方々は見ておられます。体験学習を行っている学校では、よく事前学習に力を注ぎます。でもそれ以上に大切なのは事後学習かも知れません。まず「現場」に連れて行く。帰ってきてから、その場所について説明する。それを心掛けられてはと思います。

<橋本>年齢と子どもの性格に応じてどういうものに触れさせていくか、考えることが必要か、と思います。同僚の社会科教員で、小学生の低学年のころ、原爆資料館に連れていかれて、当時は被災者の様子などの模型がかなり生々しく展示されていたので、怖い思いしか残らなかったという話を聞いたことがあります。

(4) 先生方の教育実践時期の経過とともに、生徒の変化について、何か感じていることはありますか。

<渡辺>生徒が自分の問題として考える学習方法が変化してきているように思います。私は「根問い」学習を提唱してきました。自分の問題意識を大切に学習です。情報が多くなる中で答えを先に出す傾向が強くなっているように思います。もっと多方面から考える学習が必要かと思います。

<川口>まわりが何でも先回りして環境を整えている中での生活で、気の毒だなあと思うことが多くなっていましたが、コロナ禍の3年間、オンライン授業が始まってからはさらにその傾向が進んだと思います。オンラインでの教員・生徒のやり取りは時間内で終わらなければという意識が働きます。対面での「終わりなき質問」など、20世紀のおとぎ話になりつつあるのかも知れません。

<橋本>私が新任の頃は、祖父母に戦争のことを聞いたということは、割と一般的でしたが、今はそういうことは、ほぼ無いように思います。

(5) 体験者の方のお話を直接お聞きすることの大切さは直感的に理解できるのですが、その

お話を聞いても心に届かないという感想を漏らす生徒がいるという事実も本で読んだことがあります。この問題について、どのように考えればよいでしょうか。

<渡辺>体験を聞くだけでは心に届かないことは事実だと思います。体験を聞くにはその語り部についてどんな時代にどんな生き方をしたのかを学んで初めて共感することが出来るからです。追体験出来て初めて体験者の気持ちに寄り添うことが出来ると思います。

<川口>歴史的な体験(戦争体験、被ばく体験、東日本大震災・東電福島原発事故など)に聴く耳を持たない生徒は確実にいます。「いる」ことを想定して話者をお招きします。どのようなすばらしいお話でも、話の受け手のおかれている状況により話の評価は変わります。またその時にはつまらないと思った話に時が経つにつれて、そういうことだったのかと気づくことがあります。卒業生からそういう話を聞いたことがあります。しめたと思いました。まあ、それが教育の醍醐味——人の人生を変えちゃった瞬間では。

<橋本>そういう生徒も勿論いるでしょうが(本人の置かれている状況によって受け止める余裕がないという事はありうるので)、少しでも心に引っかかる生徒が増えれば、十分成果はあがっているのではないかと考えます。

(6) 今までの戦争、今起きている戦争の伝え方について質問です。クラス内には多様な国籍、ルーツを持つ生徒がいる場合どのようなアプローチがいいのでしょうか。

<渡辺>自分の国だけでなく言語も歴史違う人たちが共存するにはまず相手を知る必要があります。自分や自国中心ではなくすべての人々が同じ人類だと自覚して生きるためにわかり合う学習が求められると思います。

<川口>「クラス内には多様な国籍、ルーツを持つ生徒がいる場合」——実際の授業では、在日韓国人・朝鮮人、中国人、ペルー国籍、インドネシア国籍、エジプト国籍などの生徒を前に授業をやったことがあります。朝鮮の植民地支配、満州事変から始まる日中全面戦争、ペルーをはじめ日本人移民の歴史、アジア太平洋戦争中に東南アジアをはじめアジア・太平洋地域で日本が何をやったか。まさに多様な視点から話すことが出来ます。そういう生徒の許可を得て移民の歴史やインドネシアでの日本軍支配について説明したこともあります。「多様な国籍、ルーツを持つ生徒」がいるのは、実は日本以外の世界では当たり前のことでは。さらにいうと、日本社会も一つではありません。教科書にはまったく記されていない、例えば明治維新評価など、日本社会の多様性を生徒に紹介されては。

<橋本>今は、国際化が進んで、例えば、ベトナムやミャンマーやフィリピンなどに自分のルーツがいる生徒が普通にいますか、と思います。古くからでも、韓国・朝鮮籍を持つ生徒がクラスにいることは十分にあり得ることか、と思います。当該生徒がどのような背景を持っているのか、担任から聞いてつかんでおくことは必要でしょうし、状況によっては、

事前に「こんな授業（＝植民地支配に関わる）やるんだけど、どう？」と話をしたりということもありました。

(7) 被害だけでなく加害の歴史を知ることも重要だというお話、本当にその通りだと思いました。登戸研究所資料館の他に、加害の歴史を知ることができる日本国内にある戦争資料館があれば教えてください。

<渡辺>戦争遺跡として残っているものは少ないですが広島県大久野島の毒ガス製造工場の跡地の博物館があります。それから立命館平和ミュージアムは歴史を深める事が出来る資料館です。

<川口>「平和のための博物館市民ネットワーク」があります。PCで検索されれば戦争と平和のミュージアムが日本国内にどれだけあるか、よく分かります。

<橋本>東京であれば、WAM「女たちの戦争と平和資料館」、長崎であれば、シンポジウムでも触れましたが、「岡まさはる記念長崎平和資料館」でしょうか。

(8) 三人の先生は、どのような先生と一緒に働きたいですか。(先生方が今一番大切にされていること・社会科教育・学校現場・日本の公教育への考えを知りたいので、この質問をします。)

<渡辺>私が陸軍登戸研究所の調査をはじめたのは川崎市教育委員会がはじめた平和人権尊重学級に生徒共に参加したことがきっかけでした。市民との共同の社会教育活動で沈黙していた人たちから口を開いてもらったことから秘密のベールが開かれました。学校教育と社会教育が協力し合うことが大切だと思います。

<川口>理想は高く、目線は低く、そういう意識を共有できる方なら、どなたでも。

<橋本>教員の資質としては、いくつか要素があると思いますが、こと社会科教育ということ言えば、「自分には分からないことがまだまだたくさんあると自覚し、学び続ける意志を持っている人」ということでしょうか。

(9) 高校の国語教師です。国語の授業で平和教材を扱う意義を、他教科担当の先生方はどのようにお感じでしょうか？また、個人的には読解のための教材になってしまわないように留意していますが、定期考査で評価材料として出題する際には、解答させた意見を点数化しづらく、扱いに困る面もありますが、授業中の話し合いも観点別で評価するのに困難さがあるため、授業での取り扱いが新課程の中で益々大変なのですが、先生方のご意見を聞かせてください。

<渡辺>知識だけでなく感覚も鍛えるのが教育ですがそれは点数では表すことは難しいと

思います。しかし、そうした取り組みは人間として成長する上で大切です。生徒との信頼関係が大切だと思います。

<川口>22年度からの新課程では中学校に続いて高等学校も観点別評価を下さいということになりましたが、そもそも国語の授業で読んだ教材についての感動や人にそのことを伝えたい、人とそれを共有したいというおしゃべりや話し合いは、評価できません。無理に評価せずに試験で測ることには限界があることを生徒に伝えてはいかがでしょうか。また22年度から始まった観点別評価なるものも、中身を生徒に説明されては。

<橋本>国語の授業だとすると、一つはテキストの読みを考える中で、背景の歴史的な状況に触れることができるでしょうし、一つの読みだけでなく様々な読み方が可能なことが多いでしょうから、その点をめぐって生徒同士が意見交流するのも有効ではないか、と考えます。評価の問題については、個々の学校ごとで様々でしょうから、個人的な見解だけ述べておきます。授業で取り扱ったことを全て評価対象にする必要は無いと、私自身は思っています。定期テストについても、試験の形式になじまない学びというのはあると思います。評価をめぐって大切なことは、それが限定的なある面しか反映していない、ということを経験も生徒も自覚的になることではないでしょうか。

(10) 橋本先生は個人のエピソードを歴史の中に位置づけるというお話をされていましたが、先生方に、授業とご自身の経験の結び付け方をうかがいたいです。

<渡辺>生徒は教師がどんな問題意識を持って授業にあたっているかに関心を持っています。従って自分がどんな思いで授業にあたっているかを話すことは大切だと思います。

<川口>(2)で述べましたが、私たち教員も生きてきた時代の「課題」を背負っています。それぞれの教員が授業で述べること、説明することは、それぞれの教員個人の経験と離れて語ることは出来ないと思います。それを意識して授業を展開されては、と思います。

<橋本>(1)に対する答えと同じです。

3 シンポジウム後アンケートに記載された質問への回答

(1) (歴史的な現地や遺跡等の)現場で考え続ける大切さはきわめて重要なが、いまの環境や状況はそれを困難にする方向に動いているように感じられます。その中で、私たちが、大切にしなければならないのは何でしょうか。

<渡辺>日本の行った戦争はもう80年近くたちました。戦争体験者から話を聞くことは難しくなってきました。私達が聞き取りした最後の世代です。そうした体験を今も残る戦争遺跡といっしょに伝えていく方法を工夫したいと思います。登戸資料館などはその典型だ

と思います。是非活用してください。

＜川口＞現場、続ける、発見、発信がキーワードでは。19世紀、20世紀の日本社会の事実と記憶の詰まった場所（現場）を訪れることを続けること。フィールドワークに新しい参加者があれば、その人が発見することがあり、フィールドワークを企画・実行する側にも新たな参加者から得られる発見があると思います。まず続けることでは。

＜橋本＞証言者の方は残念ながら減りつつありますし、史跡も再開発等で残らないケースもままあります。史跡の保存や証言のアーカイブというのは、当然重要ですが、社会科教師たちが、残っているものをどう活用するのか、もっと考えていくことが大切か、と思います。今回のシンポジウムも、そのような試みとして大変有難いものであったと感じています。

(2) 1. 川口先生がおっしゃっていた市民の教育と横のつながりをつくっていく重要性に深く頷きました。川口先生が今後取り組まれることを教えてください。

2. NGOで主に人権活動にかかわり、平和をつくる着実な準備のひとつとしてレイシズムなどの差別をなくしていく活動をおこなってきました。今後、持続可能な人類のためには、平和と人権は不可分で、(特にグローバルなシチズンシップ教育を行なっていく際にも)平和教育と人権教育の融合・連携が重要だと思いますが、学校教育と社会教育でそれぞれ、どういう可能性があるか(あるいは具体的な実践が考えられるか)、教えてください。

＜渡辺＞登戸研究所が発掘され、資料館を設置できたのは学校教育と社会教育の一体となった活動があったからです。明治大学はそうした成果を受けて資料館を平和教育・科学教育・歴史教育の発信受信の場になることを目的にしました。是非活用してください。

＜川口＞1. これまで行ってきた学校のフィールドワークに保護者枠で市民の方にご参加いただければ。また、さまざまな市民活動のご案内も。丸山真男手帖の会『丸山真男手帖』第71号を来年前半に刊行予定です。川口宛てにご連絡ください。

2. 今年3月までの教員生活の中で行ってきた授業、フィールドワークについて、平和教育・人権教育と大上段にかざしてやってきたことはありません。19世紀・20世紀前半の日本社会の歴史を説明することは、そのまま戦争が肯定されていた時代、すべての人が平等ではない社会について論じることになります。その上で20世紀後半以降の時代になってもなお差別禁止法さえない日本社会の現状については、戦後の歴史を学ぶことが欠かせないと思います。そのような学習会など作られるようでしたら、ご協力いたします。

＜橋本＞今の学校教育で必要にして十分な歴史教育・平和教育を実施するのは、時間的にほぼ無理だと考えているので、どうしても大人になってからも学び続けることが必要だと、

思っています。そういう意味で、市民活動や社会教育の中で、歴史や平和について学ぶ機会が少しでも増えていくことは大切だと考えます。学校現場に身をおいている立場で言えば、PTAの活動の一部で、そのような役割を担うことは、可能性があるのかな、と思います。

- (3) シンポジウムで、ウクライナ戦争の状況を子供達に質問された際に、どう回答してよいか分からないという話がありましたが、子供たちはその後どういう反応をされるのでしょうか。また分からないといった回答をする理由は、自分の考えを生徒に伝える事に多少なりとも抵抗があるからでしょうか？

今後ウクライナ戦争が教育の現場で話に上がる事は増えると思われれます。その際に先生方は子供達にどのように伝えていくのか非常に興味があります。自分達では平和を望んでいても周囲の国がそうでない場合、どのように平和と言われる状態を維持していくのか難しい問題だと思います。

<渡辺>ロシアのウクライナ侵略をみるときの重要な視点は一般の住民が無残に殺戮されることをどう見るかがポイントだと思います。今 90 歳以上のヒバクシャや空襲被害者がまた語りはじめているのも大切です。国連憲章ではそうした侵略を否定しました。武力で平和は創れない、外交的活動による平和の維持をどう構築していくべきかを考えたいものです。

<川口>22年2月24日以降のロシア軍によるウクライナ侵攻を考える時に、小生の頭をよぎるのは、1965年に米国が侵攻して始まったベトナム戦争です。今は日本政府も日本国民もウクライナ侵攻に賛成することはありません。ところが、米軍のベトナム侵攻を当時の佐藤栄作政権は支持しました。日本は後方支援基地となりベトナム特需に沸き、米軍支配下の沖縄からはB52爆撃機による渡洋爆撃が行われました。その時、日本社会で「ベトナム反戦」を主張することは勇気が要ることでしたし、自分たちの社会を考える、見直すきっかけとなりました。そういう営為を現在の日本社会に生きる人々が行っているといえるでしょうか。宣戦布告なき戦争に、柳条湖事件から始まった満州事変を重ね合わせる体験者の方もいます。しかし、多くの人々はウクライナ侵攻反対と言いながら、台湾海峡危機だという報道や政治家の煽動によって防衛費(軍事費)増強に賛成していないでしょうか。「苦しい平和」という言葉があります。勇ましい(カッコイイ)軍事行動ではなく、相手側との対話による緊張の緩和こそ必要だと思います。「ウクライナ侵攻反対」をいう以上に、日本社会の当面する「軍事費増強」について、目の前の生徒たちに語り、説明する必要があると思います。90年前の柳条湖事件翌年の満州国誕生の年から軍事費はうなぎ上り、2・26事件・盧溝橋事件から始まる「支那事変」以降は天井知らずとなりました。

<橋本>「分からない」と発言したのは、私かと思います。事柄があまりに複雑で（だいたい、地名ですら多くの人に馴染みのないものが多かったのではないのでしょうか）、自分自身も十分に理解できてないことを、そして分かっている乏しい部分も簡単には説明できない中で、「(今後どうなっていくのか、いつごろ戦争が終わるのか) 分からない」という趣旨で生徒には語ったように記憶しています。

私自身の考えを生徒に伝えることについて、抵抗があるわけではありません。しかし、教師の発言というのは影響力が強いのは確かなので、もう少し生徒たち自身に考えて欲しい場合は、「自分の思っていることはあるけど、皆にもう少し考えて欲しいので、今は言いません」という言い方をすることがままあるかな、という気はします。

ウクライナの問題で難しいのは、世の中でも論争になっていますが、とにかく人々を死傷から守るためには、どんなにウクライナが譲歩しても停戦すべきだと言えるかどうかだと思います。とある歴史教育者が雑誌に書いていましたが、「(自分たちはベトナム戦争の時期) ベトナム人民の武力抵抗を大いに支持した。そこに、何の矛盾も疑問も感じていなかった。」「ベトナム人民の武力抵抗支持と非戦・非武装の平和主義支持との『矛盾』」をどう考えるのか、と同じ問題が今、私たちの前に提出されているのだ、と思います。この問いに関する自分なりの明快な答えがないことも、「分からない」ということにつながっているように思います。

(4) なぜ第二次大戦が起こったのか、をどのように教えているのでしょうか。

<渡辺>第一次世界大戦終結後、国際連盟がつけられ力による勢力均衡体制が戦争の要因で集団安全保障による外交による平和の維持が求められるようになりました。それにドイツ・イタリア・日本などがファシズムによる戦争を起こすことになったのが第二次世界大戦でした。日本も当初は国際連盟に加入していましたが脱退しました。それに反対して東大の横田喜三郎はラジオで自分の見解を述べましたがそれに軍部をはじめ攻撃がなされそうした見解が消え去り日本もファシズム国に転換します。そうした内容を10月から資料館では企画展示します。見に来てください。

<川口>まず名称の付けられた経緯から説明されては。なぜ「第二」なのか、「第一」という戦争との関係は。1931年に日本が起こした軍事行動（柳条湖事件→満州事変）が拡大して日中間の全面戦争となった「支那事変」。ところが、日本政府・軍隊は戦争とは言いませんでした。1939年独軍のポーランド侵攻から始まったヨーロッパ戦争（当時の日本では「欧州戦争」と呼ばれました）が、1941年6月の独ソ戦の開始、12月の日本と米英との戦いが始まる中で連合国側が第二次世界大戦と呼ぶようになりました。戦争の名称の呼び方の変化から、当時の国際関係について、理解を深めることが出来るのでは。また経済面から

はソビエト連邦という社会主義を標榜する国家がある中での、資本主義諸国を襲った世界恐慌への各国の対応として説明を展開されてはと思います。

<橋本>すみませんが、質問が大きすぎますので、部分的に(10)でお答えします。

(5) 医療・介護の現場職員への教育活動として、平和について学べるような企画を行っています。しかし、単発的な企画で一人一人が主体的に平和について問題意識を持つまでになっていません。何かアドバイスをお願いします。

<渡辺>医療現場では特に生命の大切さを学ぶことが大切だと思います。とりわけ戦争は勝つためには手段を選ばないようになります。国境なき医師団などの活動のように民衆的視点で生命を考えることは大切だと思います。

<川口>テキスト(例:中学校教科書)を使っての勉強会や映像(TVドキュメンタリー、映画など)を通しての学習会、体験者や専門研究者を招いての講演会などをされておられるのでしょうか。フィールドワークはいかがでしょうか。「単発的な企画で」と言われますが、単発的でもやらないよりはどれだけ職場の方のヒントになっているか。それを今度は「点」ではなく「面」にするには、①楽しく、②つながり・つなげる、③毎日の職場から離れて「現場」へ行くことが大事ではないでしょうか。難しい顔をしなければならない勉強会は長続きしません。勉強会や学習会でやったことについて、紙でも SNS でもよいですから、参加者の「ひとこと」を求めて書いてもらいましょう。それが続いていけばつながりが出て来ます。そしてたまには毎日の日常から離れて、事実と記憶が詰まった場所へ。フィールドワークでしたら、ご協力できます。

<橋本>日本でも、医療と戦争というのは、密接に結びついていたと思いますので、そこから考えるべきことはたくさんあるように思います。ナチスが障がい者たちまでも抹殺しようとしたのは有名ですが、そういう点から「いのち」という問題を考えるという切り口もあると思います。医療・介護の現場の方には近いことなのでは、と思います。

(6) 一方的に伝えること以外に、どう考えさせるかのテクニックについて教えてください。

<渡辺>歴史は暗記の学習ではありません。どうしてそんなことが起きるのか自分で問題意識を持って考えるようにすることが大切だと思います。

<川口>テクニックはありませんが、①日付にこだわる、②モノ・場所にこだわる。①日本の敗戦をめぐる日付「8・15」と「9・2」「9・7」について。3月1日には、1954年3月1日の米軍によるビキニ環礁での水爆ブラボー実験について、説明できます。何年前の出来事か、歴史事実がぐっと身近になります。②私たちが当たり前のように飲んでる牛乳と戦後の給食で出された脱脂粉乳。脱脂粉乳は米国の被占領国援助で日本に送られた家畜の

えさ（脱脂粉乳は現在ではスキムミルクでダイエット食品とも）。①に例示したビキニ環礁のあるマーシャル諸島共和国のたどった近現代の歴史。ある場所を通して世界史、日本史を見られては。

<橋本>一般的にしかお答えできませんが、一つは、どう教員が問いをつくるのか、ということ、でしょうか。そこに生徒の興味を引く要素が問いをつくる時には、大切かと思いません。後は、同じことを聞くのでも、教員から聞くより、同じ教室にいるクラスメイトから、あるいはゲストティーチャーから聞く方が残ることは多いというのは経験的に言えるでしょうか。

(7) 生徒さんたちの登戸研究所史料館見学の感想を知りたいです。

<渡辺>近年の資料館報掲載の来館者感想から抜粋します。

「日本史を選択していたのでとても興味深い内容でした。受験勉強ではやらない内容などもあったのでとてもおもしろかったです。」(10代)

「登戸研究所内の情報の〔ママ〕戦時中に全くもれていなかったのが驚いた。」(10代)

「戦争といったら爆弾などの兵器をつかって攻撃するということしかイメージになかったけど、情報で敵を混乱させたり戦意をそう失させたりするという手段もあると知り驚きました。」(10代)

「10代の子供が10Mをこえる大きな風船を作っていた事におどろいた。」(10歳未満)

「宿題の感想文を書こうと思い、やってきました。宮前区からきましたが、来たかいがあったと思います。メモをとって感想文がんばります。細かく知れてよかったです。」(小6)

「日本が何をして、他国に損害を与えようとしていたのが分かったし当時の日本の技術力の高さに驚いた。本物そっくりの偽札は素人からしてみれば同じようにしか見えなかった。(中略)教科書では教えてくれないような内容を勉強できたし、仮に教科書に載っていたとしてもこのようなものは記念館などに行って自分の目で見ることに意味があると考える。(10代)

<川口>資料や説明パネルの内容、ご案内いただいた館員の方々の説明に圧倒された、初めて事実を知ったという感想が多いです。そこから生徒一人ひとりがどう考えるか。すぐには答えは出ません。

<橋本>大きくまとめると、

- ① 高校生が事実の発掘に大きな力を発揮していることへの驚き
- ② 自分の身近な地域で、戦争遂行のために大変なことが行われていた、という驚き
- ③ なぜ、事実がなかなか明らかにならなかったのか、という疑問

④ 働いていた人たちが、秘密を抱えていて戦後も苦悶して、生きていかざるを得なかったことへの共感という感じです。

(8) 戦争が総力戦となって軍需工業で働く以外にも市民（国民）は全員が戦争参加者であることをどうとらえればよいのでしょうか。銃後と戦場は一体なので銃後の破壊は戦闘行為とみなせるのでしょうか。一面的に被害者としてとらえがちな非戦闘者の戦争責任をどう考えたらよいのでしょうか。ルメイの無差別爆撃に全く賛同しませんが、ルメイのやり方をやりすぎというだけでは抑止できないと考えます。

徹底抗戦の軍部と国民を打ち砕くにはアメリカはどうしたらよかったのでしょうか。原爆も予告されており、その後の毒ガス使用も当然予告されるだろうし、それでも抗戦したら国家消滅あるいは民族滅亡にだれが責任を負うのでしょうか。誰をどう咎めたらよいのでしょうか。

丸山の言葉が印象的ですが、オウムのようにになっていた当時の日本の状況を内部から変えられなかったことをどう教えたらよいのでしょうか。

ドイツと違って戦争の反省なく（嫌悪感・被害者意識は強いが）戦前の体制を基本的に維持したり再生した今日の日本をどう説明したらよいのでしょうか。

<渡辺> (9) と併せて回答します。

<川口> シンポジウムで丸山氏の言葉を紹介しました。戦時下の日本社会がオウムそのものだった。もう一つは「横につながる」。7月8日の安倍晋三元首相の狙撃・暗殺後の7月10日の参議院選挙後に世界基督教統一神霊協会（統一教会）と安倍晋三・自民党のただならぬ関係が明らかになってきました。オウムをカルトと考えるなら統一教会もカルトです。大日本帝国を思想的に支えていた国家神道も21世紀の今日から観ればカルトです。国家神道を引きずる自民党右派議員が統一教会との親和性が濃いというのもうなずける気がします。大日本帝国の治者—天皇・日本政府・軍部と被治者—国民双方に戦争責任はあります。しかし、治者・被治者の責任には違いがあると考えます。治者の責任について、連合国側の戦争裁判が不十分に終わり、結果としてそれが被治者自身が戦争責任を考えることを不十分に現在まで来てしまった。でも希望はあると思います。昨今のテレビや映画などのメディアがドキュメンタリーを通じて改めて治者、被治者それぞれの戦争責任について問うような番組や映像を作り、大多数とはいえないものの、確実に見ている視聴者がいます。1945年をはさんで今年は1868年明治維新から77年、敗戦から77年の年です。戦争責任とともに戦後責任についても考えることが必要だと思います。丸山氏の戦時下の日本社会をオウムに例えたことと「横につながってください」という発言は同じ場所で述

べられています。今後の日本社会をオウムにしないために、私たち市民一人ひとりが横につながりましょう。

<橋本>この質問も（9）で、一部お答えします。

（9）日本はどうして、戦争に突き進んでいったのかをもう少し具体的に教えてください。

<渡辺>私は戦争を考える際、被害・加害・加担・抵抗の視点から資料で取り組んできました。

特に戦争と民衆のかかわりを考える際、最初から加害という立場の人はほとんどいません。加担させられるのです。また抵抗もできなくなります。その歴史の構造を考えさせることが大切だと思います。権力者は「だまし」「ごまかし」「おどし」「ならし」の手法で民衆を加担させ、抵抗できなくする構造を考えさせたいものです。

<川口>（3）、（8）で述べさせていただいた戦争、治者・被治者の戦争責任の問題がお答えになりますか。

<橋本>戦争の歴史を学ぶのは、戦争が起こらないようによく考えるため、と私は思っています。戦争にどのように突き進んでいったのか、ということを考えるには、政治や外交を振り返ってみるのは、当然不可欠ですが、国民が戦争を「支えた」のは、どのような状況の下であったのか（プロパガンダによって巻き込まれるとも考えられるでしょうから、「支えた」と鉤括弧をつけておきますが）をよく振り返る必要がある、と思います。子どもの頃、日本人はなぜ戦争に反対しなかったのか、と素朴に疑問に思ったことがありました。アジア・太平洋戦争についていえば、国内で被害が大きく拡がったのは最後の何年か（何年とするべきか、難しいところですが、空襲の激化という点からすれば最後の2年間でしょうか）な訳で、その前は軍事的な行動を指示していた人たちも相当な数がいたはずですが、大国意識、帝国意識と言うべきものを当時の日本人は持っていた訳ですから、その構造をよく振り返っておかねばならない、と考えます。そして、私も十分にできている訳ではありませんが、授業に落とし込んでいく必要があるか、と思います。

（10）歴史を正しく伝えていくということは非常に難しいです。とりわけ昭和の加害者としての日本国の歴史を正しく理解することは難しいです。其の為にも史跡は大事に残してほしいです。

<渡辺>私は長く戦争遺跡を保存するための運動に携わってきました。歴史を後世に残すには人と物を追体験する場が大変大切だと思います。

<川口>ヒト・モノ・場所が事実を伝えます。19世紀後半から20世紀の歴史的事実についての体験を語るヒトがいなくなる中で、残されたもの（モノ＝遺物）が語ること、その場所

が教えてくれることは、私たちの歴史的想像力を豊かにしてくれます。ヒトの体験の記録、モノと場所の保存について、より多くの人にその意義を知らせましょう。

<橋本>同感です。史跡だけでなく、史料をきちんと残すことも大切か、と思います。

以 上